大月
経済学辞典

経済学辞典編集委員会編

大月書店

大月経済学辞典

1972年4月10日第1刷発行
1988年5月25日第10刷発行

定価6800円

編　者㊞　経済学辞典編集委員会
発行者　平　智　享
印刷者　山　元　悟

〒113 東京都文京区本郷2-11-9
発行所　株式会社　大　月　書　店
印刷　三晃印刷㈱
製本　㈱中條製本
電話(営業)813-4651(編集)814-2931 振替 東京3-16387

Printed in Japan
落丁・乱丁本はお取替いたします

ISBN4-272-11008-X　C0337

序　　文

この大月《経済学辞典》は，科学的社会主義の立場にたちつつ，近代経済学の成果をも最大限にとり入れた，現代の経済学辞典として刊行される．

マルクスやレーニンの時代からすでに1世紀ないし半世紀以上を経過した現在，科学的社会主義は，部分的な紆余曲折を別とすれば，全体として大きく発展し，その内容ははるかに豊富なものになり，広範な運動として定着している．本辞典で，マルクス，レーニンという個人的名称ではなく，科学的社会主義という一般的名称を採用したことには，科学的社会主義の運動を，国民全体の協同事業として推進したいという願いがこめられている．

もちろん，この科学的社会主義を国民的協同事業として推進することは，けっして平坦な道ゆきではなく，そこには多くの困難が横たわっている．だが私たちは，そのことを自覚するからこそ，あえて協同事業の1具体例として，本辞典の作成を試みたのである．

この辞典には，第1線で活躍している824名という多数の科学者・研究者が参加している．近代経済学者や経済学以外の諸分野の科学者・研究者をもふくめて，これらの人たちはすべて，科学的社会主義の経済学辞典を刊行するという趣旨に同意して参加された．本辞典は，経済学に関連のある全分野の科学者の自主的・学際的な協同事業として編集されたものである．したがって，現在の日本の学界の動きと水準がありのままに集約され，総合されている．

私たちが辞典の編集を志したのには3つの理由がある．第1は，学際的な協力をとおして，真に国民に奉仕することのできる辞典をつくりたいと考えたからである．経済学は，社会，自然，人文のすべての科学分野を結びつける基本的な環となる科学であり，職業や専門のいかんにかかわらず，老若男女を問わず，経済学の知識なしですますことはできない．国民が自分のおかれた立場との関連で経済学にもとめるものを提供すること，これが本辞典のねらいである．

本辞典が，これから経済学を学ぼうとしている人たちの学習書として，また，さまざまな職業に従事している人たちの手引書として，また，さまざまな分野で研究に従事する人たちの参考書として活用されることを，私たちは期待している．

第2は，民主的改革のための理論的基礎を提供しうる辞典をつくりたいと考えたからである．こんにちわが国の科学的社会主義は，高度に発達した資本主義経済の機構を民主的に改革し，経済民主主義を実現するという道をつうじて前進しようとしている．そのために現代の資本主義的経済機構の運営と結びついた近代経済学の諸成果を吸収することは大きな現実的意義をもっている．本辞典が，科学的社会主義の立場を貫きつつ，近代経済学の諸理論・諸概念を精密な選定のうえ大幅にとり入れようと試みたのは，そうした見地からにほかならない．

第3は，現在ほど科学的知識の体系を必要としている時代はないと考えたからである．現在、世界は混迷と激動のまっただなかにある．第2次大戦後，相対的に安定した成長を続けた資本主義世界は，石油危機を契機として本格的な不況に見舞われ，いわば構造それ自体の危機が深まっている．この渦中で，異例の高度成長をとげたわが国の経済と国民生活のうえにも，かつて経験しなかったような複雑な経済的困難が発生しつつある．他方，社会主義諸国では，中ソ対立などその未成熟性を露呈するような事態が生まれている．まさに“不確実性の時代”が問題になるゆえんである．だが，混迷と激動の度合いが大きければ大きいほど，その状況をあきらかにする責務がますます重く科学者の肩に課せられてくる．本辞典は，この混迷と激動の時代にたいする科学的な挑戦である．

この混迷と激動をのりこえていくことを現代の人類史は要請している．この時代の要請にこたえるために，科学的社会主義をいっそう充実することが必要であろう．本辞典がそのために多少なりとも役だちうるならば幸いである．

さて，ここで本辞典の構成上の特徴をのべておこう．

第1に，辞引としての機能性を発揮できるよう，中項目主義を採用し，全分野を一括して50音順に配列した．同時に，全体を18の専門領域に分類し，この

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

専門領域を大きくは基本的な総論と具体的な各論とに分け，小さくは若干の主要なテーマ別に細分し，それぞれに各項目を位置づけている(巻末の分野別総目次)．この専門別・テーマ別分類は，体系辞典であることを意味するわけではなく，科学的社会主義の経済学の方向性を示すもので，本辞典を利用しやすくするための方策である．

第2に，経済学だけでなく，経済学と密接に関連する諸分野(哲学・社会思想・社会学・政治・法律・統計・科学-技術論など)の主要項目を，主として総論の〈社会科学〉と〈統計〉で，部分的には各論の関係する諸領域で，可能なかぎり広範囲に包含し，経済学と諸科学との関連領域に属する諸項目を最大限に採用している．

第3に，本辞典の専門別・テーマ別分類と科学的社会主義の理論的・歴史的構成法とは，密接に関連している．総論の〈経済理論Ⅰ・Ⅱ〉は，《資本論》《帝国主義論》《国家独占資本主義論》を軸として歴史的に展開されてきたマルクス主義ないし科学的社会主義の経済理論を，〈学説史Ⅰ〉は，経済学の生成，マルクス主義経済学の成立と発展の過程を，〈経済史〉は，現代資本主義にいたるまでの人類の歴史をとりあつかい，各論(財政，金融，産業経済，農業，企業・経営，会計，労働問題・社会問題，地域経済，国際経済，社会主義)では，それぞれの具体的な項目について，詳細・綿密に，全面的に説きあかしている．総論と各論との結節点に位置するのが〈経済政策〉であり，ここで，国家独占資本主義の政策と将来を展望する経済民主主義の問題が集約的に示される．

第4に，経済民主主義実現の過程では，近代経済学を活用する必要が生じるから，近代経済学も項目別に整理されて，主として総論の〈学説史Ⅱ〉で，部分的には各論の関連する領域で，全面的に展開されている．こうして，本辞典だけで，近代経済学が習得できるようになっている．

以上のようなねらいと特徴をもって編集された本辞典の示す展望が，国民運動の新たな前進のための“幕あけ”として貢献することができるならば，私たちの協同事業にも大きな光明がともることになる．国民の皆さん方が活用され，いっそうの前進のために多くの積極的な提言をよせられることを望んでやまない．

なお，最後に本辞典作成にあたって数多くの方々に多大な協力をいただいた．とくに編集のご協力を得た方々の名前をあげれば，長期にわたってご協力をいただいた盛田常夫，土屋保男氏をはじめとして，青木外志夫，鰺坂真，鮎沢成男，石田和夫，市川弘勝，伊藤陽一，井上秀次郎，今宮謙二，遠藤孝，大崎平八郎，大橋英五，大橋渉，小川誠，小沢辰男，角瀬保雄，笠原長寿，片岡昇，加藤邦興，儀我壮一郎，北川隆吉，君塚芳郎，木元進一郎，近昭夫，権泰吉，作間逸雄，笹川儀三郎，敷田禮二，柴田悦子，島田豊，関根猪一郎，田口富久治，橘博，田中正俊，谷田庄三，田沼肇，長砂實，永原慶二，中村政則，中村瑞穂，成田修身，根津文夫，長谷川彰，長谷川廣，長谷川義和，平井都士夫，平野喜一郎，福田邦夫，宮坂富之助，三好正巳，毛利良一，保田芳昭，山崎隆三，吉田忠，渡辺睦らの諸氏である．これらの方々のご協力とご支援のおかげでこの大事業は達成されたといっても過言ではない．この場をかりて厚くお礼申しあげる次第である．

また，辞典作り独特の複雑さや困難さに耐え，最後まで奮闘くださった大月書店の方々ならびに三晃印刷，凸版印刷の方々に謝意を表する．

1979年1月

経済学辞典編集委員会

凡　　例

Ⅰ　項目について

(1)　項目は50音順に配列した．項目の検出には，目次および分野別総目次，索引を活用されたい．

(2)　複数の呼称・訳語が一般に使われている事項は，代表的と思われるものを項目名とし，他を（　）に入れて併記した．そのさい，後者は見よ項目としてもあげた．

（例）　**IE（インダストリアル－エンジニアリング）**

インダストリアル－エンジニアリング　→IE

(3)　各種機関は原則として正式名称を項目名とし，略称は見よ項目としてあげた．

（例）　**欧州経済共同体**

EEC　→欧州経済共同体

(4)　複数の概念が相互に密接な関連をもっているとき，それらを併記して1項目とした場合がある．そのさい項目の配列は冒頭の事項にしたがい，後出の事項は見よ項目としてあげた．

（例）　**不変資本・可変資本**　は不変資本として配列

可変資本　→不変資本・可変資本

(5)　項目見出しには必要に応じてそれに相当する外国語を付した．そのさい，原則として〔英〕（英語），〔独〕（ドイツ語），〔仏〕（フランス語），〔露〕（ロシア語）の順に記した．その他〔羅〕（ラテン語），〔希〕（ギリシア語）等を記した場合がある．

(6)　人名項目のうち外国人は姓のみを示した．

Ⅱ　本文について

(1)　文章は現代かなづかい，新送りがなにより，漢字はなるべく当用漢字の範囲にかぎるようにつとめた．したがって同音漢字による書きかえを採用した場合もあるが，学術上必要なもの，かな表記では読みにくいものは，必ずしもそれによらない場合もある．

(2)　難読と思われる用語には読みを付した．

(3)　暦年は原則として西暦で表わし，必要に応じて日本年号を付記した．

（例）　1573年（天正1），1869年（明治2）

(4)　文中での敬称はいっさい省略した．

(5)　参照項目は，その項目の本文末尾に→印で示した．

(6)　記号について

〈　〉……引用文および注意を促す術語

《　》……著書・論文・雑誌の題名

Ⅲ　参考文献について

(1)　参考文献は基本的なものにとどめ，各項目の末尾に〔文献〕として掲げた．

(2)　参考文献の配列順序は，マルクス，エンゲルス，レーニンの著作，邦語文献，欧文文献，ロシア語文献の順とし，そのおのおのを原則として，邦語文献は著(編)者名の50音順，その他は著(編)者名のアルファベット順で掲げた．

(3)　文献の記載の仕方について

(i)　単行本の場合

著(編)者名，書名，出版社名(外国語文献の場合は省略)，刊行年の順序で記した．

(ii)　雑誌掲載論文の場合

筆者名，論文名，掲載誌名，巻号，刊行年の順序で記載し，邦語雑誌の場合は掲載誌名以下を（　）でくくり，外国語文献の場合は　in:　以下に掲載誌名を示した．

(iii)　単行本に掲載された論文の場合

筆者名，論文名のあとに，邦語文献の場合は　所収：　として，外国語文献の場合は　in:　として，以下にその論文が掲載されている単行本を(i)の規準に従って示した．

(iv)　外国語文献で翻訳書のあるものは，一般に入手または閲覧しにくい場合や，部分訳である場合を除いて，できるかぎり訳書を付し，上記の形式に準じて（　）内に示した．複数の訳書がある場合は，原則として最新訳をあげた．

(4)　文庫本は刊行年を省略した．

(5)　マルクス，エンゲルス，レーニンの著作は訳者名，欧文による原書名，刊行年は省略し，大月書店刊行の《マルクス＝エンゲルス全集》《レーニン全集》の収録巻数を示した．《資本論》については全集版の指示も省略したが，《資本論》第１巻は全集第23巻ａ・ｂ，第２巻は全集第24巻，第３巻は全集第25巻ａ・ｂに収録されている．なお，マルクス，エンゲルス，レーニンの著作・論文・全集についてはそれぞれの人名項目を参照されたい．

Ⅳ　執筆者について

執筆者名は各項目の末尾に示した．

執筆者一覧

相澤秀一
相沢与一
相田利雄
青木國彦
青木圭介
青木志郎
青木外志夫
青木美智男
赤沢計真
赤堀邦雄
秋間実
秋本育夫
浅井良夫
朝尾直弘
浅尾仁
朝岡良平
浅野栄一
浅野幸雄
浅利一郎
味岡徹
鯵坂真
芦田文夫
芦田亘
足立英之
安孫子麟
阿部統
阿部真也
天野光則
鮎沢成男
荒憲治郎
荒井正夫
荒川光正
荒木武司
荒牧正憲
荒又重雄
有井行夫
有尾善繁
有田正三
粟田賢三
安藤実
安藤嘉友
飯田鼎
伊賀隆
五十嵐光男
池上一志
池上惇
池田正孝
池永輝之
飯盛信男
石田和夫
石田精一
石田望
石塚裕道
石原忠男
居城弘
泉谷勝美
和泉重行
泉卓二
泉俊衛
泉弘志
伊勢田穆
市川弘勝
市川深
一ノ瀬秀文
市原亮平
井手啓二
伊藤セツ
伊藤正直
伊東光晴
伊藤陽一
稲毛満春
稲原康雄
乾卓
井野隆一
井上和衛
井上完二
井上清
井上巽
井上秀次郎
井上宏
井上吉男
伊部正之
今井俊一
今田治
今田正
今宮謙二
井村喜代子
岩井浩
岩崎允胤
岩田巌雄
岩田裕
岩田勝雄
岩波一寛
岩林彪
岩元和秋
上田勝彦
上田慧
上野俊樹
上原信博
鵜飼康友
臼井晋
内田勝敏
内田忠夫
内山昭
内山昂
馬原鉄男
梅川勉
梅田欽治
梅津政之
浦田直美
浦田昌計
海野明昇
海野八尋
江口英一
江口正義
江藤价泰
遠藤晃
遠藤孝
及川徹
大海原宏
大江志乃夫
大木一訓
逢坂充
大崎平八郎
大里仁士
大島隆雄
大島雄一
太田秀通

太田　譲
大谷禎之介
大塚秀之
大即英夫
大西勝明
大野隆男
大野達三
大橋昭一
大橋英五
大橋隆憲
大林弘道
大吹勝男
大屋祐雪
大藪輝雄
岡倉古志郎
岡崎栄松
岡崎省三
岡田尚三
岡田　進
岡橋　保
岡部利良
岡部廣治
岡村明達
岡本愛次
岡本　武
岡本　正
小川　洌
小川浩八郎
小川善作
小川　誠
小川政亮
置塩信雄
沖田修二
奥田幸助
奥地　正
奥野定通
尾崎芳治

小沢辰男
尾関周二
小田中聰樹
小野朝男
小野一郎
小野一一郎
小野　堅
小野秀生
小野塚敬一
海道　進
海道勝稔
戒能通厚
貝山道博
角瀬保雄
笠原長寿
梶井　功
梶浦恒男
柏尾昌哉
上總康行
糟谷憲一
片岡　昇
片山伍一
勝山　進
加藤一郎
加藤邦興
加藤幸三郎
加藤正治
加藤睦夫
加藤盛弘
加藤佑治
加藤義忠
角松正雄
門脇　彰
門脇禎二
金持伸子
金田重喜
金子ハルオ

上岡正行
上川郁江
上島　武
加茂利男
唐渡興宣
川合一郎
河相一成
河井智康
河合信雄
川上正道
川口清史
川口　弘
川越敬三
河越重任
川鍋正敏
川東竫弘
川辺平八郎
河邑重光
河村　望
上林貞治郎
儀我壮一郎
岸本晴雄
木田和雄
喜多克己
北川和彦
北川隆吉
北川　豊
北田寛二
北田芳治
北野正一
北野弘久
北原　勇
北原泰作
北村敬直
木下勝一
木下　滋
木原正雄

君島和彦
君塚芳郎
木村栄吉
木村和範
木村太郎
木村正身
木元錦哉
木元進一郎
木本忠昭
金　鍾碩
金原左門
久木田重和
久保新一
久保　亨
久保田順
久保庭真彰
倉林義正
久留島陽三
久留間健
黒川俊雄
桑野　仁
毛島達雄
源河朝典
五井直弘
高　昇孝
甲賀光秀
幸田精蔵
高堂俊彌
河野通博
古賀英三郎
伍賀一道
小島健司
小島　仁
小竹豊治
小谷　崇
小谷汪之
小谷正守

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

小谷義次
後藤泰二
後藤靖
小林勇
小林威雄
小林登美枝
小林英夫
小林賢斎
小檜山政克
小松淑郎
小宮昌平
小山洋司
是永純弘
近昭夫
権泰吉
近藤哲生
近藤文男
斉藤寿彦
斉藤博
斎藤稔
坂井昭夫
酒井一夫
酒井惇一
酒井治郎
坂井豊一
酒井文雄
酒井凌三
坂本和一
阪本欣三郎
坂本忠次
坂本雅子
坂元慶行
坂寄俊雄
作道洋太郎
作間逸雄
桜井豊
桜谷勝美
笹川儀三郎
佐々木佳代
佐々木建
佐々木潤之介
佐々木享
佐々木隆生
佐々木憲昭
佐々木雅幸
佐藤金三郎
佐藤敬三
佐藤定幸
佐藤昌一郎
佐藤毅
佐藤哲郎
佐藤博明
佐藤真人
佐藤芳雄
真田是
座間紘一
椎名重明
塩沢照俊
塩田庄兵衛
敷田禮二
重富健一
重森暁
宍戸邦彦
地主重美
篠崎恒夫
篠原三郎
芝池靖夫
柴垣和夫
柴田悦子
芝田進午
柴田貞次郎
柴田徳衛
柴田政利
柴田政義
柴田嘉彦
芝原拓自
渋谷將
島弘
島恭彦
島崎晴哉
島田悦子
島田豊
嶋津千利世
清水貞俊
清水誠
清水嘉治
下平尾勲
下山房雄
寿福真美
城座和夫
庄司興吉
白井瑛一
白井正敏
眞保潤一郎
新保博
水津雄三
末川清
須賀庸夫
菅原秀人
杉田元宜
杉野圀明
杉之原寿一
杉原四郎
杉本昭七
杉本時哉
杉森滉一
鈴木昭
鈴木文熹
鈴木重靖
鈴木茂
鈴木茂
鈴木武
鈴木諒一
鷲見友好
角谷登志雄
清山卓郎
関恒義
関弥三郎
関口尚志
関口裕子
関下稔
瀬原義生
副島種典
外崎光広
田井修司
醍醐聰
高浦忠彦
高木彰
高木幸二郎
高木秀玄
高木督夫
高木暢哉
高崎禎夫
高島進
高須賀義博
高田太久吉
高田博
高橋菊江
高橋洸
高橋孝助
高橋秀悦
高橋昭三
高橋俊夫
高橋彦博
高橋冨士夫
高橋祐吉
高橋由明
田口幸一

田口富久治
武居良明
竹内真一
竹内信仁
武村　勇
竹村脩一
竹村孝雄
田坂　元
田島司郎
田添京二
橘　　博
巽　信晴
建林隆喜
建部正義
立山杣彦
田中章義
田中生夫
田中　巌
田中重博
田中省三
田中隆雄
田中昌人
田中正俊
田中雄三
田中義久
谷　和雄
谷江武士
谷江幸雄
谷田庄三
谷原順夫
谷山治雄
田沼　肇
種瀬　茂
田端博邦
玉置紀夫
玉置雄次郎
玉木義男
玉野井昌夫
玉村博巳
田村早苗
田村紀之
遅塚忠躬
長　幸男
一寸木俊昭
辻　和夫
辻岡靖仁
辻村一郎
辻村江太郎
津田内匠
津田秀夫
土屋保男
都野尚典
鶴田廣巳
鶴田満彦
寺尾晃洋
寺本光朗
暉峻衆三
土居英二
土井正興
土居靖範
遠山茂樹
戸木田嘉久
常盤政治
徳永正二郎
徳本　鎮
戸田芳実
利根川治夫
土肥秀一
富沢賢治
富田虎男
富塚良三
豊田四郎
内藤正中
中居　裕
長岡新吉
長岡　豊
中川スミ
中川信義
中川　弘
中嶋慎治
長砂　實
中瀬寿一
中田照子
中楯　興
中谷武雄
中谷　武
中谷哲郎
中西健一
中根敏晴
中野一新
中野徹三
中野雄策
中林賢二郎
永原慶二
中原弘二
長松秀志
中村静治
中村孝俊
中村達也
中村尚美
中村　浩
中村平治
中村政則
中村雅秀
仲村政文
中村萬次
中村瑞穂
長屋政勝
中山金治
永山利和
夏目啓二
浪江　巌
成田修身
成瀬龍夫
西川純子
西川清治
西口清勝
西田美昭
西谷　敏
西成田豊
西野　勉
西野万里
西堀文隆
西村閑也
西村汎子
西元良行
二宮厚美
二瓶剛男
仁連孝昭
貫　隆夫
野口俊邦
野澤正徳
野沢　豊
野田正穂
野々村一雄
野村　拓
野村秀和
野村良樹
則武保夫
硲　正夫
橋本　勲
橋本和美
橋本玲子
長谷川彰
長谷川治清
長谷川廣
長谷川正安
長谷川義和

秦　惟人
畑田重夫
畑中康一
服部文男
羽鳥卓也
花田仁伍
馬場克三
土生長穂
浜川一憲
浜下武志
浜砂敬郎
浜田博男
浜林正夫
濱本　泰
早川征一郎
早坂啓造
林　昭
林堅太郎
林　智
林　直道
林　正樹
林　裕二
原　嘉彦
原島礼二
原田　實
半田秀男
日隈威徳
日野秀逸
姫野教善
百田義治
平井都士夫
平井規之
平井文子
平尾武久
平田清明
平田重明
平野絢子
平野和由
平野喜一郎
平野浩一
広田　純
広田司朗
広原盛明
笛木俊一
深町郁弥
深谷克己
吹春寛一
福岡博之
福島久一
福田静夫
福田善乙
藤井一行
藤井誠一
藤井光男
藤岡　惇
藤岡貞彦
藤岡純一
藤川亮吉
藤島洋一
藤田暁男
藤田　勇
藤田武夫
藤田　整
藤谷謙二
藤本　武
藤本光夫
藤原　彰
藤原貞雄
二場邦彦
舟場正富
古川　哲
古林輝久
逸見　啓
保坂哲郎
保志　恂
細迫朝夫
堀　晋作
堀　敏一
堀江英一
堀尾輝久
堀中　浩
本間要一郎
前川恭一
前田達男
真木実彦
正木久司
眞実一男
真下　満
増島　宏
増田寿男
町田　実
松井正樹
松井安信
松井芳郎
松石勝彦
松尾光芳
松岡正美
松川七郎
松木栄三
松田和久
松田弘三
松原セツ
松村一隆
松村勝弘
松村文武
松本哲男
松元　宏
松本正徳
丸山恵也
三浦一郎
三浦正俊
三上宏美
三木谷良一
三国英実
御子柴雅夫
三島倫八
水田　洋
水田　博
水野正一
水林　彪
御園喜博
道又健治郎
光藤　昇
三潴信邦
光谷一二三
三富紀敬
南　昭二
峰岸純夫
美濃口武雄
宮井久男
宮川謙三
三宅義夫
宮坂富之助
宮崎犀一
宮崎義一
宮沢健一
宮田吉蔵
宮村光重
宮本憲一
宮本十蔵
三代澤経人
三好正巳
三輪悌三
三輪俊和
向井喜典
向笠良一
武蔵武彦
武藤剛一

村岡俊三
村木啓介
村田　稔
牟礼早苗
毛利良一
茂木一之
望月喜市
元島邦夫
森　　章
森　俊治
森　武麿
森　英樹
森　博美
森　義隆
森井淳吉
森岡孝二
森川　章
森川訳雄
森川　博
森下　覚
森下二次也
盛田常夫
森田俊男
森滝健一郎
森野勝好
守屋典郎
屋嘉宗彦
矢沢康祐
安井國雄
安井恒則
安川悦子
保田芳昭
安原　茂
柳ケ瀬孝三
柳田節子
山口　孝
山口卓志
山口正之
山口　定
山崎俊雄
山崎隆三
山下　哲
山下高之
山下幸夫
山科三郎
山田一生
山田喜志夫
山田耕之介
山田定市
山田壽太郎
山田　彌
山田弘史
山田浩之
山田　貢
山村勝郎
山本　秋
山本　繁
山本清治
山本義彦
山脇友宏
湯川和夫
湯川利和
由比　凌
横尾邦夫
横倉久夫
横倉弘行
横田　茂
横本　宏
横山政敏
横山正彦
吉井清文
吉岡健次
吉川久治
吉澤　南
吉田和夫
吉田　暁
吉田静一
吉田正三
吉田　忠
吉田信雄
吉田秀夫
吉田文和
吉信　粛
吉原泰助
吉村朔夫
四元忠博
米川哲夫
米沢治文
米沢秀夫
米田康彦
米村　司
萬井隆令
萬谷　迪
良知　力
脇田　修
渡辺源次郎
渡辺敬司
渡辺佐平
渡辺　峻
渡部　行
渡辺公観
渡辺　睦
渡辺洋三
渡会勝義

（50音順）

目　次

ア

IE(インダストリアル-エンジニアリング)……1
IMF-GATT体制……1
アウタルキー……2
青色申告制度……2
赤字国債……2
アジア-アフリカ人民連帯機構……2
アジア開発銀行……2
アジア的生産様式……3
圧縮記帳……3
斡旋・調停・仲裁……3
アーバニゼーション……4
アフリカの経済統合……4
アベイラビリティー理論……4
アヘン問題……5
網元・船元……5
アムステルダム-インタナショナル……5
アメリカ的生活様式……5
アメリカ独立革命……6
アメリカの世界戦略……6
アメリカ労働総同盟＝産業別組織会議……7
アラブ民族運動……7
安価な政府……7
安全衛生管理……8
安全衛生管理者……8
安全教育……8
安定条件……8
安保闘争……9

イ

生きた労働・対象化された労働……9
イギリス-ケインズ派・アメリカ-ケインズ派……9
イギリス労働組合会議……10
違憲立法審査権……10
意思決定(資本主義企業の)……10
意思決定過程……11
移住……11
遺制……12
依存効果……12
イタリア労働総同盟……12
一時金制度……12
1次産品問題……12
1ドル官僚……13
一律プラス-アルファ方式……13
一般会計予算……13
一般均衡の存在……13
一般均衡分析……14
一般組合……15
一般特恵……15
一般不可能性定理(アローの)……15
イデオロギー……16
井上財政……16
移民・移民労働者……16
医薬産業……17
入会……17
入浜権……18
医療政策……18
医療問題……18
医療労働……18
因果性……19
イングランド銀行……19
因子分析法……19
インダストリアル-マーケティング……19
インタナショナル……20
インタナショナル-マーケティング……20
インデクセーション……21
インデクセーション(資源の)……21
インド国民会議派……21
インパクト-ローン・タイド-ローン……21
インフレーション……21
インフレーション(社会主義のもとでの)……22
インフレーション会計……22
インフレーション学説……23
インフレーション対策……24
インフレーションの指標……24

ウ

ヴァルガ……25
VA(価値分析)……25
ヴィクセル……25
$v+m$のドグマ……26
ヴィンティジ-モデル……26
ウェーバー……26
ウクラード……27
請負制……27
打ちこわし……27
売上高総利益率……28
売上高利益率……28
運搬管理……28
運輸費……28

エ

営業権…… 28
営業の自由と秘密…… 29
英連邦特恵関税制度…… 29
SDR…… 29
NNW…… 30
エネルギー…… 30
エネルギー革命…… 31
エネルギー政策…… 31
撰銭…… 31
LSI(大規模集積回路)…… 32
エレクトロニクス…… 32
円…… 32
演繹と帰納…… 33
沿岸漁業…… 33
エンクレーブ(飛び地)…… 33
エンクロージャー…… 33
園芸・施設農業…… 34
エンゲル係数…… 34
エンゲルス…… 34
塩鉄の専売…… 35
遠洋漁業…… 35

オ

OR(オペレーションズ-リサーチ)…… 35
オイル-ショック…… 36
オイル-ダラー…… 36
欧州共同体…… 36
欧州経済共同体…… 37
欧州原子力共同体…… 37
欧州自由貿易連合…… 38
欧州石炭鉄鋼共同体…… 38
欧州通貨協定…… 38
欧州通貨同盟…… 38
欧州農業共同市場…… 39
大口融資規制…… 39
大蔵省…… 39
大蔵省預金部…… 40
沖合漁業…… 40
オーストリア学派…… 40
オートメーション…… 41
オーバー-ローン…… 41
卸売商業…… 41
卸売物価指数…… 42
オンライン-システム・オフライン-システム…… 42

カ

海運…… 43
海運集約化…… 43
海運同盟…… 43
海外投資(日本の)…… 43
外貨手取率…… 44
海関制度…… 44
階級…… 45
階級意識…… 45
階級構成…… 45
階級構成表…… 46
階級闘争…… 47
会計学…… 47
会計学(資本主義諸国の)…… 48
会計学(日本の)…… 48
会計学説(各国の)…… 49
会計学説(日本の)…… 50
会計公準…… 51
会計史(各国の)…… 52
会計史(日本の)…… 52
会計主体論…… 53
会計情報理論…… 53
会計政策…… 54
会計制度…… 54
会計責任…… 55
会計測定論…… 55
会計団体…… 55
会計帳簿…… 56
会計的術策…… 56
会計の民主的統制…… 56
解雇…… 57
開港(日本)…… 57
外国為替…… 57
外国為替及び外国貿易管理法…… 58
外国為替資金特別会計…… 58
外国為替市場…… 58
外国為替相場…… 59
外国貿易…… 59
外国貿易論…… 60
外債…… 61
外資(日本への)…… 61
外資政策…… 62
外資に関する法律…… 62
会社証券…… 62
廻船…… 63
階層…… 63
解体地域…… 63
回転期間…… 63
概念…… 64
開発援助委員会…… 64
開発金融…… 64
外部効果…… 64
開放耕地制度…… 65
開放体系・封鎖体系…… 65
海洋開発…… 65
海洋開発産業…… 66
海洋法…… 66
改良主義…… 66
改良主義(日本の)…… 67
改良農法…… 67
カウツキー…… 68
価格…… 68
価格(社会主義のもとでの)…… 68
科学…… 69
価格革命…… 69

此为试读,需要完整PDF请访问: www.ertongbook.com